

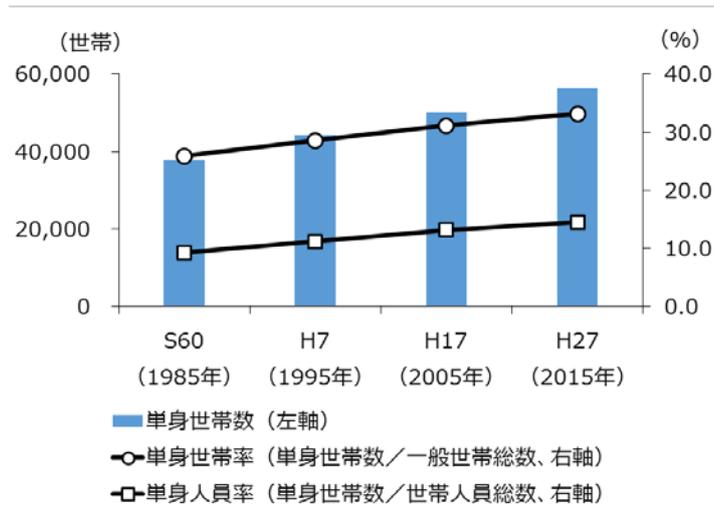
豊中市の単身世帯の生活に関する調査研究Ⅱ 要約

1. 調査研究の背景・目的

現在、単身世帯（現在誰とも同居せずひとりで暮らしている世帯）は増加傾向にある。未婚率の上昇に伴う壮年期（30～50歳代）の単身世帯の増加も見られ、家族の支え合いに依拠することが困難な単身高齢者が、これまで以上に増える将来が予期される。

そこで本調査研究では、壮年単身世帯の現在の生活や、老後の展望などを明らかにする。そのことを通じて、今後どのような課題が生じる可能性があるのか、課題に対してどのような対応が政策的に求められるのかを検討し、今後の地域政策の基礎資料とする。

豊中市の単身世帯の推移



(出典) 国勢調査

2. 問い

調査研究を進めるにあたり、以下のような問いを設定する。

問い1：壮年期の単身者はどのようなライフコースをたどってきたのか。

問い2：壮年期の単身者は現在どのような生活を送っているのか。現在の生活リスクとライフコースの間には、どのような関連があるのか。

問い3：壮年期の単身者はどのような老後を展望し、備えているのか。老後の生活リスクとライフコースの間には、どのような関連があるのか。

3. 調査方法

- 豊中市内在住の壮年期の単身者 29 人にインタビュー調査を実施。参加者は依頼文を郵送し募った。
- インタビュー項目は仕事や家族形態、居住地の変遷といったライフコースを聞き取りつつ、暮らし向きや社会関係、老後の展望などを尋ねた。

4. 主な結果

<単身世帯のライフコース>

- 壮年期の単身世帯のライフコースに特にインパクトを与える契機に「離別」「転職・離職」「親のケア」がある。

- これらの契機が降りかかった際に、本人や家族が所有する資源が乏しい場合、単身者の生活リスクが高くなる。

<経済リスク>

- 特に男性の未婚者と女性の離別者の中に、経済リスクが高いケースが散見。就労の不安定さを理由に親元同居を継続し、親の逝去に伴い単身化している。
- 親のケアが単身世帯の生活リスクを高める場合あり。不安定就労のケースほど、仕事をパートタイムに切り替えるなど経済リスクを高める選択へと傾きやすい。

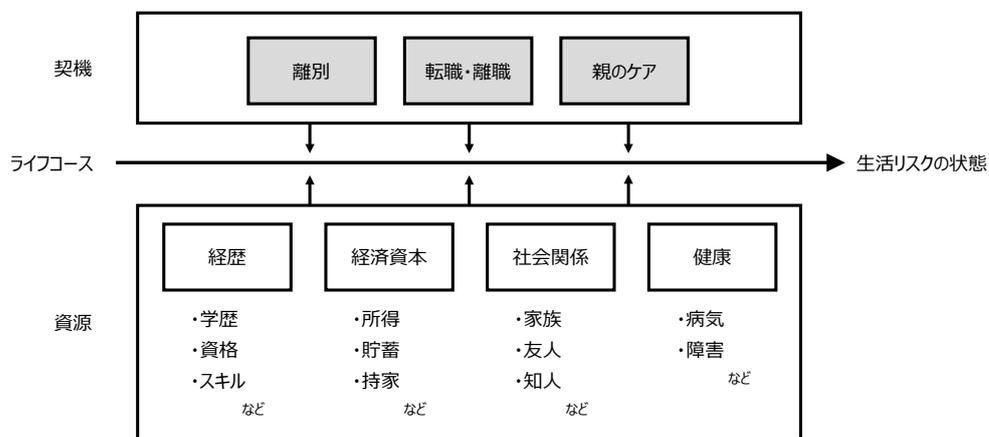
<孤立リスク>

- 単身世帯のうち、暮らし向きが厳しい男性のケースで孤立リスクが高い。女性は仕事以外のつながりを持ちやすいが、男性はつながりが仕事関係に偏るため。
- 単身世帯は行政や地域との接点をほとんど持たない。
- 単身世帯の多くは自立=非依存志向を有し、困った時のサポート源が乏しくなりやすい。

<老後の生活リスク>

- 単身世帯の多くは老後の健康・介護に対する不安が強い。
- 不安定就労が続いてきたケースでは、貯蓄や公的年金に頼った老後の生活が困難。働き続ける以外の選択肢に乏しく、健康悪化で生活リスクをさらに高める可能性が大。
- 現時点で複数の生活リスクを抱えているケースほど、老後の時間的見通しがつきづらい。

壮年単身世帯のライフコース上の生活リスク・契機・資源の関係



5. 結論

次のような取り組みが行政・地域で求められる。

- 親のケアを契機とした潜在的な単身世帯のサポート
- 健康を起点としたつながりづくり
- 「壮年単身世帯」をターゲットとした情報発信
- 無作為抽出によるアウトリーチ